

コロナ禍が生んだ新たな気づき

COVID-19の世界的な流行に、翻弄された一年。我々、医療従事者は、多くの制限を受けながら生活し、必死で現場を支えてきました。時には差別とも闘い、家族となかなか会えないなど、本当に大変な生活を送ってきました。振り返れば大変な一年であったと、マイナスにとらえられがちです。

しかし、このパンデミックによって、新たな気づきが多く生まれたことも事実です。本当に社会にとって、何が必要なのか。そう考えた時に、医療というのは社会にとって不可欠であり、様々な仕事がある中でも、絶対に消えることのない、重要な仕事を担っていることを再認識したのです。人が助けを必要とする限り、私たち医療従事者は、どんな大変な状況下にあっても、歩みを止めてはならず、絶えず一歩先を目指さなくてはなりません。

COVID-19への対応があまりに大変だということを理由に、目の前の対応のみに追われ、前向きに取り組むことをあきらめていないでしょうか。誰もがそのような状態だとすると、このパンデミックが明けた時には、一歩も進んでいない「停滞した社会」が待っていることでしょう。今こそ、自分をもう一度見つめ直し、COVID-19の最前線に立つ私たちが、率先して前に進むべきなのです。そうしてこそ、私たち人類は「明るい一歩進んだ社会」を得ることができます。

こんな状況だからこそ、自分に磨きをかけましょう。そして、その力で医療従事者が自ら、率先して社会を引っ張り、全体を“前へ”進めていきましょう。来たるべき「コロナ明け」の世界は、もうすぐそこに来ています。どんなことでも良いのです。次の一年、何か前向きなことを見つけ、取り組みましょう。その気持ちと行動こそが、今、一番大切なことなのではないでしょうか。



日本離床学会 会長

曷川 元